

# 国 語 教 育

## 1 研究主題

生きる力としてはたらく国語力の育成 テーマをもって子どもが学習をすすめていくために
--

## 2 主題設定の理由

国語科は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を調和的に育成し、相手や目的、場所、状況に応じて疑問や課題を自分の言葉で表現し、考えたり解決したりできるような生きてはたらく言語能力へ高めていくことが実践課題である。

本校の子どもたちは素直で、家庭的に安定している子どもが多い。学習への関心が高く知的好奇心も旺盛であり、課題に向かって真面目に取り組む子どもが大半である。

国語科の「話すこと・聞くこと」に関して、子どもたちは与えられた事にはきはきは話したり伝えたりすることはできる。しかし、自分で考えて適切に会話をするのは苦手なようである。また、目上の相手に対して、場に応じた適切な言葉遣いで話すことができない子どもが多い。朝の会の「スピーチコーナー」や帰りの会の「一日の輝きコーナー」などで、伝え合ったり質問し合ったりすることで、それらの力をつけているところである。

「書くこと」に関しては、体験したことや事実に基づいた事は書けるが、自分の考えや思いを書くのに苦手意識をもっているようである。また、量はそこそこ書けても、漢字が使えず、改行ができない子どももいる。評価の観点を明確にし、個人指導の必要性を感じている。

「読むこと」に関しては、音読はほとんどの子どもがすすんでできる。読書も好きで、朝の読書タイムは静かに好きな本を読むことができる。物語教材の学習では、場面の様子や登場人物の気持ちを読み取ることはでき、その発言も積極的にできる。しかし、読み取ったことに対して自分の考えを発言できるまでには至っていない。

また、日常生活の中での子どもたちの実態をみると、自分の気持ちや考えを相手に十分伝えることができず、人間関係でトラブルを起こすことが多い。よりよい人間関係を築いていくには、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成し、「伝え合う力を高める」ことが不可欠である。また、自分の気持ちや考えが相手に正確に伝わるように、場に応じた適切な言葉で表現できる力をつけさせることも、他人との関係が希薄になっている現代社会で生きていくためにも重要なことであると考えられる。

そこで、本校の教育目標である「豊かな心をもち、主体的に生きる子どもを育成する」をふまえて、研究主題を「生きる力としてはたらく国語力の育成 テーマをもって子どもが学習をすすめていくために」と設定した。

日常生活で人と人を結ぶ言葉として使われている「国語」を適切に用い、言葉や文、文章を正確に読み取り豊かに表現することが、生きる力としてはたらく国語力となり、

豊かな心をもった子どもを育成することにつながると考えたからである。特に、子ども自身がテーマをもちながら学習をすすめていくということは、学習の見通しが立ち、自分達ですべきことがわかるということである。まさに主体的に生きる子どもを育成することにつながるであろうと考えた。

### 3 生きる力としてはたらく国語力

「国語力」とは、学習指導要領国語科の目標に掲げられている「国語を適切に表現し正確に理解する能力」や「伝え合う力」であると考ええる。

「適切に表現する能力」とは、言葉を適切に使い、自分の考えを自分の言葉で積極的に表現する能力や態度であり、「正確に理解する能力」とは、言葉の使い方と内容や事柄を正確に理解する能力である。このような能力は、一人一人の子どもが言語の主体的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする、日常生活に生きてはたらく力となる。

「伝え合う力」とは、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力である。この力はこれからの情報化・国際化の社会で「生きてはたらく国語の力」であり、人間形成に資する国語科の重要な内容である。

したがって、人と人とが言葉で伝え合う力を高めていくことが必須の課題となつてこよう。価値観が多様化するこれからの社会では、異なった考えをもった人と積極的にコミュニケーションを図り、問題を解決する能力が大切になってくる。

これまで述べてきた「国語力」が、豊かな人間性を育むことにつながるよう、今までの研究の成果を大切にしながら、真に「生きてはたらく国語力」を育成すべく、研究を重ねていかなければと考えている。

### 4 研究の方向

本校は39年間、国語科学習の研究に取り組んできた。

平成10・11年頃までは、物語文中心の研究であった。作品を読み深め、その主題に迫らせる授業が中心であった。

平成12・13年頃からは、朗読会、劇化、多読してブックトークなどの発展学習に力を入れた取組へと変わった。しかし、主教材の読み深めをする時間が少なくなったため、教材を共通理解して学習に臨んだり、共通する一つの話を話し合ったりする場面が少なくなり、基礎的な国語の力を生かした発展学習ではなかった。

そこで、研究主題に迫るため、平成17年頃からは、これまでのどちらの取組も大切にした単元学習を取り入れた研究にすすんだ。

そして、今年度からは、これまでの単元学習を継承しつつ、基礎的な国語の力を生かし、「言語活動の充実」に一層重きを置いた研究を重ねたいと考えている。

## 5 研究内容

### 言語活動の充実（読みから表現への工夫）

学習指導要領では、文学作品や説明文、詩、伝記、報告文など様々な教材で読み取ったことを、様々な方法で豊かに表現する「言語活動」にも力を入れている。

また、学習指導要領・国語科の「改善の基本方針」には、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」を一層重視することが示された。この方針を受け、「改善の具体的事項」として、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域で、日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動を行う能力を確実に身に付けることができるように指導することが記されている。

自分の気持ちや考えを相手に十分伝えることができず、人間関係でトラブルを起こすことが多い本校の子どもたちが、日常生活に必要とされる言語活動を行うことで、「国語を適切に表現し正確に理解する能力」や「伝え合う力」を身に付けることができると考えている。

また、子どもたちが興味、関心をもち続けることができる学習の流れをつくるため、次の3点に留意しながら言語活動を単元の流れに組み込みたいと考えている。

(1) 単元を通して一貫した言語活動を位置づける。

自ら学び課題を解決していく能力の育成を重視するために、個別の活動を並べるだけでなく、単元を通して目的意識や関心の高まりを生むような言語活動を位置づける。

(2) 教材や指導目標に合致した言語活動を選ぶ。

取り上げる教材や言語活動がどのような特徴をもっているのか、その特徴をどのように生かすことで、当該単元で付けたい国語の能力を確実に育成できるか把握しながら言語活動を行う。

(3) 子どもの主体的な意識を生かす。

「この思いを相手に伝えたい」「この文が大好き」「この情報をもっと知りたい」等、子どもの主体的な言語に対する意識を一層重視する。

例えば、

低学年、二年生の教材「音やようすをあらわすことば」で、オノマトペを教材として、見たもの聞いたものをオノマトペという言葉で表したり、友達の作った表現を味わったりして、言葉のもつおもしろさを理解した。さらに、それらを他学年にも広げようとクイズを作り、動作化や音読なども駆使して、オノマトペのおもしろさをみんなで楽しみながら、学習することができた。

中学年、三年生の教材「モチモチの木」では、大好きな「モチモチの木」を二年生に伝えるために、好きな場面で感じ取ったことをグループに分かれて表現した。表現方法としては、音読を中心に取り組んだ。動作化を取り入れた音読や、スクリーン映像を利用した音読、ペープサート劇、紙芝居などグループごとに創意工夫がみられる発表となり、自分なりに感じ取った「モチモチの木」を伝えることができた。

高学年、五年生の教材「わらくつの中の神様」では、この教材のみを学習するのではなく、杉みき子の作品群を読みすすめた。感動した作品をブックトークでどう表現すれば、相手に感動を伝え読みたいと思ってもらえるか。既習の学習方法を活かし、作品の特性を考慮しながら、表現活動を行った。

言語活動は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域において行っている。子どもたちそれぞれの力が十分発揮できるような単元構成を組み、表現したいことができるような基礎・基本の力を付けることも必須条件となってくるだろう。

#### 各学年の実践例

1年生・・・単元名『ふゆのことばでたのしもう』

主教材「あつまれ、ふゆのことば」

書くことの言語活動      カルタ・カレンダー・しおり  
クリスマスカード・年賀状づくり

2年生・・・単元名『がまくん・かえるくんの世界を楽しもう』

主教材「お手紙」

読むことの言語活動      アーノルド・ローベルの作品の多読

3年生・・・単元名『感じて伝えたい ～大好きなモチモチの木～』

主教材「モチモチの木」

読むことの言語活動      音読中心の紙芝居・ペープサート劇

4年生・・・単元名『ファンタジーのおもしろさを伝えよう』

主教材「白いぼうし」「山ねこ、おことわり」

話すこと・聞くことの言語活動

「車のいろは空のいろ」シリーズのブックトーク

5年生・・・単元名『友達を感じて読もう・書こう』

主教材「新しい友達」

書くこと、話すこと・聞くことの言語活動

友達が題材の「詩」「作文」「討論会」

6年生・・・単元名『いのちを感じて読もう・書こう』

主教材「海の命」「山のいのち」

書くことの言語活動      「いのち」の文集づくり

このように、生活に結びついた取り組みが、子どもたちの生きる力につながると確信している。また、言語活動の充実を図ることで、学習することに充実感を味わえる子ども

もを育てたいと考えている。

以上、述べてきたように、単元学習を組み、言語活動の充実を図ることで研究主題に迫るために、次の3点を取り組みながら研究を深めていきたいと考えている。

テーマ設定と単元構想の工夫 読書活動の充実 学習活動の工夫
-------------------------------------

#### テーマ設定と単元構想の工夫

##### テーマ設定

課題を追求するエネルギーが単元の終わりまで持続していけるテーマを設定する。単元の終わりまで、子どもたちが興味、関心をもち続けることができる学習の流れをつくるのが、子どもが主体的に学習をすすめていくことを大きく支援できると考えているからである。

##### 単元構想の工夫

国語に対する関心を深め、興味をもってわくわくと学習をすすめられるように単元を構成することに力を入れている。子どもが興味をもち追求エネルギーが持続でき、最後まで課題に向かっていける単元を構成するにはアイデアが必要になってくる。子どもの実態をしっかりとみつけ、主教材の特徴を活かしながら、単元構想を工夫している。

また、単元を組むことで、「子どもに主体的に学習させていける」「人との関わりができる（同学年・異学年・地域の人たち）」「教師の教材研究の幅が広がる」等、利点も挙げられる。

##### 読書活動の充実

新学習指導要領の国語科改訂の7つの要点のひとつに「読書活動の充実」が挙げられている。また、領域「C読むこと」の指導事項には、

- 1・2年では、「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」
- 3・4年では、「目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと」
- 5・6年では、「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと」

と謳われていて、読書活動の充実が重要視されている。

「本校の子どもたちは朝の読書の時間には静かに好きな本を読むことができる」と前述したが、偏った種類や発達段階に適していない内容の本を読んでいる子どももみかける。読書活動は語彙や知識を増やすだけでなく、生涯学習とも深く結びついている。

例えば、文学教材や小説、詩などを読むなかで、登場人物の気持ちに共感し人の気持ちに寄り添えるようになるであろう。これは、自分の考えや生き方を広めることにつながっていく。説明文や意見文、報告書などを読むことで、真実を知ったり、自分と異なる意見にふれたり、知識を広めたりすることができる。自分の生活を見つめ、工夫し、よりよく生きようとするにつながっていく。

このように、読書活動を充実させることは、「生きてはたらく国語力を育成する」ことに直結していくのである。読書活動をうまく単元に組み込んだ言語活動を実践してい

きたい。

#### 学習活動の工夫

言語活動を充実させ、研究主題にせまるためには、基礎的・基本的な学習の内容も充実させなければならない。そのための学習活動の工夫が求められる。

##### (1) 单元の中での工夫

一斉学習、グループ学習、個人学習

##### (2) 一時間の授業の中での工夫

#### 適切な言語活動

・45分の中に、「話す・聞く」「書く」「読む」の各活動をバランスよく取り入れる工夫が必要である。高学年になるほど全て取り入れるのは難しいが、その時間のめあてに迫るために、適切な言語活動を取り入れる工夫が求められる。

#### 全員参加の授業

・子どもが動き、全員が楽しんで参加できる学習活動の工夫も必要である。一斉音読や書く活動、グループ学習などが挙げられる。

#### 話し合いの形態

・二人で対話、グループで、お面をつけてプレイ、相互指名など  
(ハンドサインの活用・・・1年から6年まで統一)

#### 音読

・指名読み、役割読み、一斉読み、群読など  
(本読みカードの活用)

#### 書く活動

・課題に対する自分の考えを書く  
・日記形式で、登場人物の気持ちを書く  
・二人で筆談形式に書く  
・イメージした絵とともに書く  
・授業の終わりに学んだことをまとめる  
(ワークシートの活用)